

## 「すべての人々のために祈れ」(「テモテ」章「」節)

### 1 イエスの言い残した事としての祈り

十字架への歩みを前にしてなされたイエス・キリストの最後の(別れの)説教がヨハネによる福音書に伝えられています(「」章)。説教の終わり近くで、イエスは次のように語っています。「今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる」(「」章「」節)と。「願いなさい」とは「祈りなさい」というのと同じです。地上に残される弟子たちに対するイエスのもっとも大きな期待、あるいは命令と言ったほうがよいかも知れませんが、それは弟子たちがみ名によって祈ることでした。み名によって祈り願うようになることであつたのです。他の、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書の終わりには復活したイエス・キリストによるいわゆる大伝道命令(全世界に出て行って福音を宣べ伝えよ)があつて、そのほうが私どもにはイエスの言い残した事として大事なことだと考えているかも知れません。そう考えることは決して間違つたことではありませんが、それと共に、それ以上に、イエス・キリストが私どもに求め命じているのは、私どもがみ名によって祈るようになること、教会がみ名によって祈る教会になることであつたのです。イエスご自身がはつきり語っているようにそれは「今まで」なかつたことでした。み名により祈ることは地上を歩む私どもにおいて私どもの教会において新しく実現されるべきことであつたのです。

新しく実現されるべきことと言っても、祈りというのはキリスト教の専売特許ではないし、どの宗教にも古くから祈りというものはある、いやどんな人間にも敬虔な祈りの心がある、そう人は言います。むしろ私どももそれは知っていますし、そのことを否定してはなりません。そうではなくて、イエス・キリストのみ名によって祈る、イエス・キリストその人を通して祈る、イエス・キリストを介さないでは祈らない、というのは、じつはそれまでなかつたことであり、教会はそれしなければならぬ、私どもはイエス・キリストのいわば遺言としてそれを実行しなければならぬということなのです。そうしていい、そうすることができ、そうしなさいとイエスは語っているのです。他の宗教の祈りと、あるいは無神論者でも口にする祈りと、キリスト教の祈りの違いはそこにあります。それは決定的な違いです。私どもは今も、私ども個人も、私ども教会も、そうしたイエスの許しと命令とに従つてキリストの名によって祈りつづけるのです。

もう一つ、他と違う、というより、キリスト教の祈りのもっとも大きな特色、あるいは本質は、私どもが祈りを捧げているその相手が、向かい合っているその方がはつきりしているということです。

考えてみれば、祈るということとは、祈る私でない方がそこにいなければ成り立たない事態です。自分に向かって祈る——「念じる」ということかも知れませんが——と

言うことは、祈りとしては形容矛盾です。成り立たない。むしろ神が私に、そして私どもに、祈れと命じているのです。神が私どもに、わたしがいつもあなたたちの前に立っている、わたしのところに来なさい、顔を上げて、背筋を伸ばし、わたしを見なさい、わたしに近づき、わたしの恵みの中に生きなさい、歩みなさいと呼びかけていてくださるのです。そこに、祈れと言ってくださる方がおられること、祈ってよいと許してくださる方がおられること、そこに聞いてくださる方がおられること、それが祈りの希望であり、キリスト教の祈りの本質です。その方の前で、ということがなければ、もはや祈りは祈りではありません。しかし反対に、どんな祈りも、もしそれが神の前でなされるなら、それは祈りです。ため息も、呻きも祈りです。耳を傾け、聞き上げてくださる方がそこにおられるからです。無言の祈りも祈りです。私どもにとって、そこにイエス・キリストの父なる神がいますということが、教会の祈りの希望なのです。

## 2 すべての人々のために

さてテモテへの手紙です。二通残されているテモテ宛ての手紙は二通とも使徒パウロの書いた手紙です。パウロとテモテの関係は伝道者としての伝道者によって信仰に導かれた一人の信徒の関係として始まりました。やがてテモテも伝道者になります。このパウロが共に神に仕える同労者としてもっとも信頼するテモテに、宣教と信仰の戦いの中にあるテモテに、父が子に対するようにと言ったらいでしょうか、福音を明らかにし、教え、論し、励まし、とくに異なる教えや偽りを語る者が現れて混乱が生じている中で伝道し牧会するさいの知恵と知識を懇切に伝達したのがこれらの書簡です。パウロが、テモテに、「まず第一に」、つまりなすべきもろのことがある中で、最初に、最優先でなすべきこととして勧め、命じたのは祈ることでした。テモテ個人としてというより、教会としてなすべき、公に、礼拝でなすべきこととして上げたのは祈りでした。

願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい(一節)。

ここで「願い」「祈り」「執り成し」「感謝」を区別して理解する、それぞれ別の意味を持つものとして受け取ることは必要ありません。要は、祈りです。「ためにささげる」とあるので、むしろ「執り成しの祈り」とまとめてもよいかも知りませんが、その必要もない。祈りをささげることをパウロは一番に求めたのです。

この勧めでもっとも目立った言葉は「すべての人々のために」という言葉です。今日の聖書箇所には、「すべて」という言葉が何回も出てきます。「すべての人々」にはじまって「すべての高官のためにも」(2節)「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを」(4節)「すべての人のあがないとして」(9節)。この「すべて」とは何なのでしょう。「すべての人々のために」祈る、それは大きすぎ

る、手に余る、私どもに信仰の背伸びを強要しているようにも聞こえる言葉です。しかしそうではないのです。5節にこうあります、

神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです(5節)。

ここに「すべて」の根拠があります。神はただひとりです。そして私どもの救い主もただひとりです。「すべて」とは、ひとりの神以外のすべてです。ひとりの救い主以外のすべてです。私どもが神を信じるということは、唯一の神がおつくりになり、そして治めておられるこの世界全部が、この世全部が、世の人々のすべてが私どもに開かれてくるということです。祈りの領域として責任の領域として、それを担えるかどうかは別にして、明らかにしてくるということです。昔出た本で、ティリーケという人が書いた「主の祈り」についての小さな本がありました(新教新書)。その副題は、世界を包む祈り、となっていたと記憶しています。祈りは世界を包み、世界に関わるのです。世界は神の世界です。どうして私どもに関係ないはずがあるのでしょうか。世界への関心を失った祈りは、他の宗教ではいざ知らず、厳しい言い方をすればキリスト教では十分な祈りにはならないのです。

### 3 平穩で落ち着いた生活を送るため

まさに「すべて」の人々ですから、この「すべての人々」に「王たちやすべての高官たち」も含まれてくるのは当然です。ただ「すべての人々」と言ってしまうと「王たちやすべての高官たち」を上げることには当然理由があったと思います。今の私どもには明らかではありません。

「王たちやすべての高官たち」、いずれも複数形です。特定の王や特定の高級官僚個人のために祈るわけではありません。「王たちやすべての高官たち」とは上に立つ政治的権威(権力)のことです。現にその任にある人たちのために祈るのです。こうした政治的権威、簡単に言えば国家ですが、それが悪だと聖書は考えていません。むしろそれはこの世界が秩序をもって保たれるために与えられた神の恵みです。そのために国家には神からそのなすべきことが与えられ、託されています。国家の果たすべき務めを、教会は、昔から、もともと一般的な表現で法と平和というような言葉で言い表してきました。法律をつくり、これを自らも守り、国民にも守らせて、平和な秩序を維持するということです。今日の感覚で言えば、国民一人ひとりの人権を守るために、またその福祉の増進のために存在すると言えましょうか。いずれにせよ立てられた政治的権威がその託された使命を果たしていくように特別の共同の責任を負っているのが教会です。なぜ特別の使命をもっているかという点、神によって国家が立てられ、使命をもち、それを果たしつつ神に奉仕することを、たとえ国家がそれを知らないとしても、教会は、聖書によって知っているからです。国家にその使命を喚

起する役割が教会にあります。教会はそのためにつねに立てられている政治的権威のために祈るのです。それは、今の政権がいやだからとか、好きだからとかには関係のない教会の不断の務めです。それによって私どもが神の恵みの中で「つねに信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るため」です。私どもの礼拝でもそうしたことが祈られていることは大変よいことだと思います。

ニーメラーの夢、というのを、お聞きになった方はあまりいらつしやらないかも知れません。ニーメラーという人はドイツ人で、ヒトラーが政権を握った時代、教会に對する不当な干渉に反對して闘ったベルリンの著名な牧師です。戦争中は強制収容所に入れられていて、戦争が終わる直前に、かろうじて脱出し、戦後、世界の教会と平和運動の指導者となって活躍した人です。1966年来日しました。その際、宮田光雄先生と対談し、そのとき語ったのがニーメラーの夢です。

戦争が終わって1945年6月から7月にかけて何回か同じ夢を見たそうです。私はまばゆいばかりの明るい光をじっと見つめていなければならなかった。その光と共に一つの声が響いてくるのだが、それは私の傍らをかすめてだれか別人に向けられていた。私は首を曲げて、それがだれか見ることはできない。しかしその声はこう尋ねていた、「お前は何か申し開きすることはあるのか」と。そしてそれに答えている声を聞いたとき、私はすっかり仰天してしまった。「はい、私には、かつて何びとも福音を語ってはくれませんでした」と答えるその声は、まさしくアードルフ・ヒトラーそのものだったから。私は驚きのあまり目を覚ました。そして雲間から聞こえてくる次の声が私にこう尋ねていることをはっきり予感できた。「お前は、なぜ、この男に福音を語らなかったのか、お前は、かつてたつぷり一時間もこの男と一緒にいて、口論し罵倒し合ったではないか。それなのに、お前は、この男に福音を告げはしなかったのだ」。こうした夢に導かれてニーメラーは、ヒトラーの時代、1933〜45年に起きた出来事に対して、だれもその責任を免れていない、教会も、私自身も、八年も牢獄につながれていたけれども、やはり責任を果たさなかった、神の審判に照らしていえば、教会が大きな罪責をもっていないなどと到底言えない、という結論に達します。それが、戦後すぐにドイツの教会が、教会の罪責を認め、告白し、再出発することにつながったのです。

ニーメラーの言う、ヒトラーに福音を語らなかつたということ、ヒトラーに伝道しなかつたことが罪だというように問題を簡単にしてしまつてはなりません。カイザルのものはカイザルに返せと言われている、カイザル自身に伝道せよというようなことは聖書には言われていません。ニーメラーの夢から私どもが教えられるのは、すべての人々のために祈れ、王たちやすべての高官のためにも祈りなさいという私どもの務めを忠実に果たさなければならぬとすることです。そうでなければ、神の審判の前に私どもは立ち得ないということです。政治的権威は、私どもの生活が、混沌とした無秩序から守られるために神様が立ててくださったものです。それは恵みです。

その権威が神から与えられたその使命をよりよく果たしていくために、私どもは福音の証しに努め、不断に祈りたいと思います。

(2018年5月6日)